安曇野と芸術実践

金井 直（信州大学人文学部准教授）

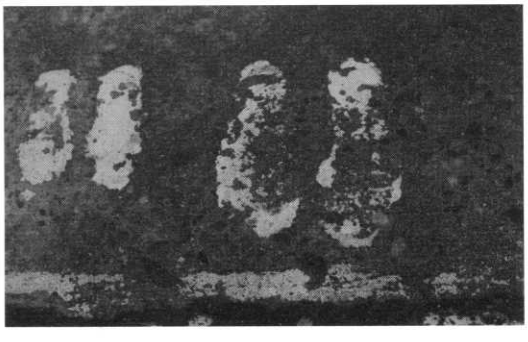
「多様な文化」

「文化のかおるまち」。安曇野市のキャッチフレーズのひとつだが、じっさいにこの地域を訪れれば、あるいは、このまちに暮らせば、周囲の大自然と人々の生活のあいだに豊かな文化を培う日常のあることに気づく。その日常はまた、歴史や伝統を未来へとつなぐ架橋でもある。2011年に公表された『安曇野市文化振興計画』が示すのも、日常本位の、骨法確かな文化の気風である。同計画の基本方針は「郷土の歴史的・文化的遺産や伝統文化、古文書などを保存・継承し、それらを活用して創造的な芸術文化活動が活発に行われるようにします」というものである。そのうえで、「地域文化の振興、歴史民俗資料の保存・活用、芸術文化施設の充実、芸術文化活動の推進」を基本目標として掲げ、さらに45項目の具体的な取り組みを列挙している(1)。

私は、この計画策定に関わった委員のひとりである。したがって、全目標の達成、バランスよい進展を強く、絶えず願っているが、同時に、芸術研究に従事する者のひとりとしては、計画の基調をなす歴史・伝統・市民の枠をあえて乗り越えるような、より多元的な文化実践としての芸術活動が、安曇野にもたらされることも有意なのではないかと考えている。「取り組み」の45番目に登場する「多様な文化との交流」をいわば拡大解釈するような活動である。

まちとは言うまでもなくひとつのコミュニティである。コミュニティとはけっして同一性（アイデンティティ）にまどろむ場ではない。むしろ絶えざるコミュニケーション／対話に開かれる空間である。ところで、コミュニケーションが成立するのは、もちろん、そこに他者が存在するからであろう。とすれば、芸術という、ときに通常の理解を凌駕する多様なるもの、アーティストという精神の冒険者／「他者」を積極的に受入れることは、本質的には、まちのコミュニケーション力の向上にもつながるはずである。いかがだろうか。

こうした、他者性・多様性の重要さは、じつは現代の美術の側にもはっきりと認められる傾向である。端的にいえば、公募展や美術団体に関わることなく、さらには美術館での展示を前提とはしない、ヒエラルキーや境界意識を取り払う新しい芸術表現が、20世紀後半から、とりわけ1990年代以後、世界中で台頭してきているのである。なかでもリレーショナル・アート（関係性の芸術）と呼称される動向は、つくりだされる作品やつくりだす主体／作者といった「定点」よりも、多様なプロセスや経験、間主観性の「変動」を重視する点で、きわめて今日的な展開をみせている。キーワードは多様性。それがまちの状況と現代美術の先端を切り結ぶ。



安曇野の可能性

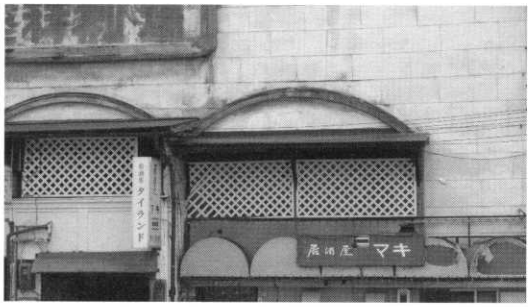
長野県内をまわって感じるのは、中小規模のミュージアムの多さである。類似施設を加えれば、その数は東京都に勝るという見方もあるほどの「博物館王国」となっており、観光立県・教育県の面目躍如である。美術系博物館すなわち美術館についても、安曇野市内には安曇野市豊科近代美術館（登録博物館）、安曇野高橋節郎記念美術館（登録博物館）、碌山美術館（登録博物館）、安曇野ジャンセン美術館（博物館相当施設）、さらに多数の類似施設が存在し、市民を、そして、訪れる観光客を楽しませている(2)。とくに近年は、安曇野アートラインの継続的な企画・広報・普及活動によって、域内の美術館の認知度は着実に高まっているようである。しかしながら、上に述べたような、まちのコミュニケーション力と現代の芸術傾向から考えるならば、いっそう多様な芸術実践に対する関心・関与が、安曇野においても醸成されてよいのではないか。名画か、あるいは市民の力作を美術館で鑑賞するという端正さは、芸術実践の一部でこそあれ、すべてではない。

このような観点から、私は今年度、実験的に3つの企画を実施した。ひとつは美術作家、水野勝規氏の滞在制作、もうひとつは大学生とのまちあるきワークショップ、そして金沢21世紀美術館キュレーター、中田耕市氏を招いてのトークと意見交換会である。

本誌3-4頁が示すように、水野氏は安曇野の旧5町村すべてを回り、撮影をおこなった。注目したいのは、いわゆる安曇野らしさが、水野氏の作品においては抽象化され、一種の原-風景として彼の映像世界に溶け込んでいることである（表紙写真参照）。安曇野ブランドを"即売しない"芸術のありかたとでも言おうか。しかし、まちがいなく水野氏は安曇野に魅了され、そこから強いインパクトとインスピレーションを受けている。「芸術的触媒」としての安曇野。これもまた安曇野ならではの本質的な芸術支援のかたちではなかろうか。今回の水野氏の滞在はおよそ1週間と短期であったが、さらに長期の滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）を実現する枠組みを整備できれば（政府助成金の導入、別荘・保養施設等の有効活用、小中学校の空き教室の利用、専門職員の配置）、本格的な芸術支援として国内外から注目され、応分のひとと情報の動きを生みだすはずである。まさしく「多様な文化との交流」（『安曇野市文化振興計画』）である。

ところで、今回の水野氏のリサーチは市域周縁部に集中したが、「芸術的触媒」という観点で言えば、都市部の魅力も

大きい。信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野学生を中心におこなった「まちあるきワークショップ」(3月2日)では、穂高駅から豊科駅周辺までを巡検し、魅力ある風景や生活景、オブジェ(?)の発見を楽しんだ。とくに豊科に満ちる昭和モダンの香りは、平成生まれの学生たちには、きわめて新鮮かつ刺激的なものであったようだ。こうした「鮮度」が、現代の若い芸術家にとっても、きわめて効果的な「芸術的触媒」となりうることは、横浜黄金町や別府市街、大阪西成区、名古屋長者町などで実現しているアートプロジェクトの例をみれば明らかである。昔ながらの飲食店・商店街区で、芸術家が暮らし、制作し、発表する。地域住民との交流あればこその表現活動だ。それはまた、地域それ自体の表現ともなりうる。観光という視点からは取り残されがちな豊科中心域の魅力を、アートによって再発見する可能性を、次年度以後、さらに検討していきたい(3)。



以上のような地域に根ざした試みをふまえたうえで、あらためて美術館の役割を考えておこう。先述のとおり、安曇野地域の美術館は公私・市内外の枠を超えて、機能的なネットワークを構築しており、市民と観光客のアクセスの向上が図られている。この点は高く評価したい。その一方で、現代美術の動向について適切な情報や見取り図を市民に提供することには、いささか躊躇いがあるように思われる。本来、美術館ほど差異・多様性のショーケースとなりうる交流空間はないのであるから、また今世紀に入って、美術のあり方も大きく変化しているのであるから、この状況には展開があってもよいと思う。各美術館(とくに公立)において、ミッションの再定義を試みて、現代美術に向き合っていただくのもよいかもしれない。あるいは「美術とはなにか、いつ美術になるのか」といった根本的な問いかけを誘発する意欲的な展覧会を、年にいちど開催してみる方法もある。この試みに、上述のアーティスト・イン・レジデンス参加作家が絡んでいけば、自ずと(作家を介して)まちと美術館の連携も強化されよう。えてして現代美術はムズカシイあるいは美術館は「敷居」が高いと言われ、教育普及ベースのわかりやすさ、入りやすさが求められるが、そうした平準化の危険性は、中田耕市氏がトークにおいて明確に指摘するところであった。美術館はそもそも特別な場なのだ。さらに良質の、ときに先鋭的な表現を市民に提供することによって、美術館を地域文化活性化の拠点とすることも、今後の選択肢のひとつではなかろうか。

まとめ、ではなく

以上、アーティスト・イン・レジデンス、市街でのアートプロジェクト、そして美術館の機能という3点から、安曇野の芸術実践の可能性を論じた。最後に、より俯瞰的に、その可能性の射程にふれておこう。

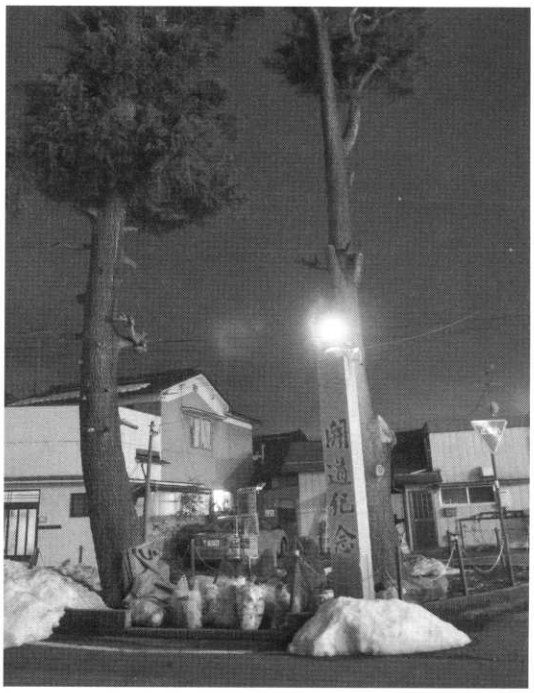
周知の通り、近年、国内各地に数多くのアートプロジェクトが誕生し、政府による支援にも支えられつつ、アートと地域の共働の機会が増えている。そのなかで、とくに注目される大規模な先行事例といえば、「越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)そして「あいちトリエンナーレ」(愛知)であろう。前者は山間部への誘客に成功し、観光アートの火付け役となった。後者は既存の美術館やホールを主会場とする都市型の芸術祭として、美術のみならず舞台芸術をも括り込んだプログラムで、祝祭性を高めている。これら2件/県の中間に長野県は位置する。このことを十分に意識しつつ、可能な芸術実践の方向と方法を考えてみてはどうだろうか。言い換えるならば、ふたつのアートプロジェクトを融合するような、あるいは、ふたつのプロジェクトの回廊となるような、「芸術的触媒」性を、安曇野において、充実させてはいかがだろうか。

長野県が、そして安曇野市が、観光県、観光市としての独自性、特別な印象を保持することは無論重要ではあるが、マクロな視点で、太平洋側と日本海側をつなぐ中部地方の文化帯の一端を担うような意識・意欲も大切なのではないか。そのような、さらなる連帯の枠組みへと5町村の合併を経験した安曇野市民の意識をひらくこともまた、アートの可能性であり、また、行政や大学など、地域の公的機関の共通課題となればと願う。次年度以後、さらに具体的な分析と実践を試みたい。

註

(1)『安曇野市文化振興計画』は市のHPから全文閲覧できる。

http://www.city.azumino.nagano.jp/gyosei/plan/bunka/azumino_culture.files/culture_project.pdf

(2)市民と観光客を対比的にとらえた安曇野市のミュージアム分析として、次を参照。辻竜平『安曇野市の美術館・博物館利用に関わる調査〜市民と観光客に対する調査の比較分析』信州大学人文学部社会学研究室、2013年。

(3)豊科市街に対する市民の意識の高まりは、長野県と地元商工会が主催する「豊科まちづくりワークショップ」の活発な活動にもよく表れている。同ワークショップが実施したまちあるき企画「歩いてみよう!豊科市街の表と裏」(2014年3月2日、9日)は、生活景の探索、あるいは一種の考現学として、今日的なアートに隣接する活動である。